

# 樹木画テストにおける「擬人的な木」に関する研究

## A Study of The Anthropomorphic in the Tree Drawing test

文学研究科教育学専攻博士前期課程修了

松 岡 舞

Mai Matsuoka

### 序論

樹木画テスト（バウムテスト）は、わが国における心理検査場面で最も使用頻度が高いテストとされ、病院臨床の場や学校現場、各種の教育関連機関で幅広く用いられている<sup>22)29)</sup>。樹木画テストは「樹木」を投影主題としたテストであり、心的象徴としての木の意味については、樹木画テストの創始者であるKoch,K.<sup>16)</sup>をはじめAve-Lallemant,U.やCastilla,D.<sup>5)</sup>など多くの研究者が詳しく述べている。

樹木画テストの解釈法は、木の形態、木の象徴性、空間図式、筆跡学的知見から行なう。しかし、樹木画テストの描画を数多く見ていると、様々な形態や木とは思えないものにも出会うことがある。樹木画テストの読み方として木の象徴性と言っても、木に見えない形態のものについてどのように解釈してよいか困難を感じた。そうした描画の中で、本研究では「人のように見える木（擬人的な木）」に注目し、その読み方に資する研究を試みた。

樹木画テストの創始者であるKoch,K.は擬人的な木について報告しているが、断片的なものにとどまっている。本研究では、小学生の学齢を主とした樹木画を対象とし、「擬人的な木」とは何かについての定義を試み、その出現率を調べ「擬人的な木」の意味について考察する。

## I. 樹木画テストにおける「擬人的な木」について

### 1. これまでの研究

#### (1) Cotte,S.

Cotte,S. (1961) は、人物画と樹木画の比較を行った研究の中で、子どもの描画の発達に関連して、樹木画と人物画の共通性について報告している<sup>4)</sup>。子どもの樹木画は4歳頃から木の形態になり、樹木画において単線の幹が描かれる時は人物画でも単線で描かれ、2本線の幹が描かれる時は人物画でも2本線で描かれるなど、人物画と樹木画の描かれ方が共通することを述べている。また、6～8歳において樹木画の幹と人物画の身体の描かれ方は類似し、樹冠が頭、根が足、樹冠内部の茂みが髪の毛のよ

うに見える樹木画が描かれると指摘している。

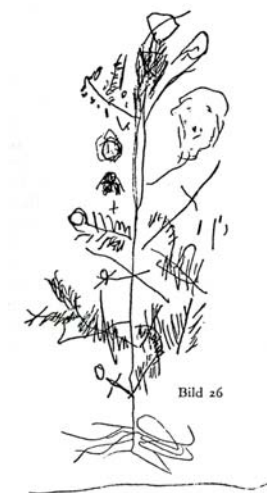
## (2) Koch,K.

Koch,K. (1957) は、2枚の図(図1, 図2)を載せ、「人間のような木」(anthropomorphic)について述べている<sup>19)</sup>。図1は、樹冠部に顔が描かれたものであり、図2は枝の先に葉や実の代わりに人の顔が描かれたものである。図2のように木の一部に顔が描かれた「人間のような木」の表現は、統合失調症などの精神疾患を示唆するものであると指摘している。さらに、図1のような樹冠部に顔を描く表現について、知的障害や、幼児から小学校低学年にかけて出現すると述べている。樹木画テストに関するKoch,K.の視点は発達の側面にあり、年齢に比して形態が幼いものは知的障害と類比する。従って、擬人的な形態の出現は、幼児から小学校低学年の低年齢児にはしばしば見られるが、ある年齢以上に出現した場合には知的障害を考える。

図1 「人間のような木」(Koch, K., 1957)



図2 「人間のような木」(Koch, K., 1957)



## (3) Chirol,C.

樹木画に関する文献研究をおこなったFromont,G.は「擬人的な木」に関してChirol,C.の研究を報告している<sup>27)</sup>。

Chirol,C. (1965) は、16～18歳の非行少年を対象に、Stora,R.による4枚法で樹木画を実施した。その結果、夢の木になって幹の部分に変化したものが26%に見られ、そのうち50%では幹の形態が象徴的なもの、すなわち、「擬人的で人間のように見える木」、「お金のなる木」、「クリスマスツリー」、「家の形をした木」があったと報告している。彼はロールシャッハテストとのテストバッテリーの結果から、「擬人的で人間のように見える木」について、未熟さのサインであるとともに、父親のイメージにおそれを抱いているサインであると指摘している<sup>12)</sup>。

#### (4) 藤岡・吉川

藤岡・吉川（1971）は、バウムの発達と生長を幹先端処理の様式から分析している<sup>13)</sup>。彼らは、幼型バウムの幹の先端を手がかりとし、幹の先端処理の様式からバウム全姿の類型化を行った。図3は、幹先端処理の移行期とバウム全姿の類型について一谷らが示したものである。幹先端処理の標準的な類型として、「人型」、「放散型」、「冠型」、「基本型」の4つがあげられている。彼らによれば、幼型は、6、7歳児の時期に幹先端処理の移行期に入り、7～9歳児では過半数が基本型をとる。「人型」は「冠型」の特殊なものであり、上部の樹冠に加えて幹の途中からまるで手のように左右に枝が描かれている。彼らが4歳～11歳（509名）を対象に行った調査では、「人型」の表現は、4～5歳で14%、6歳で15%、7歳で13%で多く出現すると報告されている。

青木（1992）は「人型」について、小学校の中学年頃で一過性で出現するものであり、幹から手のように左右に枝が描かれるのは、「上下のバランスのための一方便ともいえるし、まさに擬人的心性があるともいえる。」と記述している<sup>29)</sup>。

図3 幹先端処理の移行期とバウム全姿の類型（藤岡・吉川，1971）



#### (5) 林

林（1977）は、「身体イメージ」と樹木画について、「絵を描くために与えられる画用紙の空間は、被験者の生活空間と同一視されることが考えられ、そこに描かれる樹木は、生活空間の位置関係をふくみ、かつ自己像が投影されると考えられる」と述べ、被験者の「身体イメージ」そのものが投影されているとみえる描画を載せている<sup>15)</sup>。年少児の描画例を挙げ、特に幼児の木の絵には擬人化された木が多く見られ、「樹木の力を借りて各人の持つイメージのある断面が1枚の紙の上に描かれる」とし

ている。林の記述する「擬人化された木」は、木全体が人のように見える描画例も挙げられているが、手を象徴する枝のように木の一部分が身体の一部を象徴することで、樹木全体が描画した人のイメージを表すものとされている。

## 2. 「擬人的な木」が意味するもの

樹木画テストにおける「擬人的な木」についての記述は、発達の側面と心理学的サインとしての側面の二つに分けることができる。発達の側面からみると、樹冠が頭、根が足、樹冠内部の茂みが髪の毛のように見える、また、頭のような樹冠の下に手のような冠下枝というように、樹木の各部位が人の身体各部位にそれぞれ対応し人のように見える木が、6歳～8歳頃に見られることが指摘されている<sup>4)13)</sup>。また、樹冠に顔が描かれているものは、幼児・小学校低学年で出現すると報告されている<sup>19)</sup>。林は、量的研究に基づいた記述ではないが、特に幼児の樹木画において、描画者の「身体イメージ」の投影と考えられるような擬人化された木が見られることを述べている<sup>15)</sup>。

樹木画テストにおける「擬人的な木」の持つ意味としては、上記のような描画の発達に関連して、未熟さのサインであるとするのが最も一般的である。すなわち、発達の経過の中で低年齢時に出現し年齢が上がるにつれて消えていく形態を、より上の年齢で描いた場合、精神的な未熟さのサインまたは知的な遅れのサインとして見ることができる<sup>9)17)</sup>。また、Koch,K.は、樹冠や幹の先に顔が描かれているものについて、知的障害や統合失調症などの精神疾患を示唆するものであると指摘している<sup>19)</sup>。このことに関連して、「擬人的な木」を解釈する際、描かれた樹木画が木にみえるか見えないかという、木の形態の問題がある。一般的な樹木画テストの読み方において、木とは思えない形態は、神経症・精神病、薬物依存を示唆するものであり、また、現実との接触の悪さのサインである<sup>9)</sup>。なお、3枚法における3枚目の夢の木はファンタジーの世界を表現するものであるため、3枚目において木に見えないものが描かれても上記のようなサインとして読むことはできない。以上のように、「擬人的な木」は未熟さのサイン、知的な遅れのサイン、また、グロテスクに表現されたものは精神病を示唆するものとして見ることができる。一方で、Chiról,C. (1965)は、「擬人的な木」について、未熟さのサインであるとともに、父親のイメージにおそれを抱いているサインであると指摘している<sup>27)</sup>。

## 3. 本研究の目的

これまで「擬人的な木」として記述されているものは、研究者によってその形態や捉える意味が異なり「擬人的な木」についてのこれまでの報告は断片的なものだといえる。本研究では、児童の描画を対象に人のように見える木を抽出し、これまでの報告を参考に「擬人的な木」とはどのような形態の木なのか、また発達の指標や心理学的サインとしてどのような意味をもつのかを明らかにすることを目的とする。

## II. 対象と方法

### 1. 調査対象と調査期間

#### (1) 公立小学校児童

ある公立小学校1～6年生を対象とし、樹木画（バウムテスト）を実施した。男児136名、女児122名を対象とした。また、対象児童についてのフェースシートを担当により記入してもらい、後日回収した。調査期間は平成19年2月であった。

#### (2) 母子生活支援施設入居の母親および子ども

全国の母子生活支援施設283箇所のうち、施設長より調査の同意が得られた84施設に入居するDV被害家族679世帯、及び非DV被害家族690世帯に対して郵送による質問紙調査及び樹木画（バウムテスト）を実施した。子どもについての質問紙は子ども一人ずつに対し記入を求め、子ども票はDV世帯1214票、非DV世帯1083票が発送された。調査期間は平成17年12月であった。

なお、本対象は主任研究者石井朝子、厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）総合研究報告「家庭内暴力被害者の自立とその支援に関する研究」の分担研究である奥山眞紀子（2006）「被害児童への治療・ケアのあり方に関する研究」<sup>24)</sup>におけるものである。調査方法は奥山によるもので、調査内容は本研究の趣旨に即して一部を抜粋し、筆者が分析を行った。

### 2. 調査方法

#### (1) 公立小学校児童

##### ①描画の実施法

授業の時間を一時間（40分間）調査の時間にあて、各クラスごとに集団で樹木画テストを実施した。

まずA4用紙を1枚配布し、①出席番号（低学年の場合は名前）、②何枚目の描画であるかを用紙の裏に書いてもらうように指示した。1枚目の教示を全体に向けて行い、樹木画を描き終わったら手をあげて合図をしてもらうように伝えた。1枚目が描き終わった児童には描いた樹木画を受け取る際に用紙を渡し、2枚目の教示を行った。2枚目が描き終わった児童には描いた樹木画を受け取る際に用紙を渡し、そのまま少し待っていてもらうように指示した。3枚目の教示は全体の7割程度の児童が2枚目を描き終わった時点で、全体に対して行った。なお、描画が早く終わり時間が余った児童で希望があった場合は、鉛筆による樹木画として一度完成した後に、色鉛筆による色塗りを許可した。

##### ②教示

教示はカスティエラの「夢の木法」の教示に従った<sup>6)</sup>。ただし、用紙を必ず縦方向に使う必要はなく、どちらでもよいことにした。

1枚目－「木を描いてください。どんな木でもかまいません」

2枚目－「また、木を描いてください。同じ木でもいいし、違う木でもいいです」

3枚目「夢の木を描いてください。つまりもっとも美しい思う木、あるいはできるものなら庭に植  
えたいと思うような木、こんな木があったらいいなと思うような木」

## (2) 母子生活支援施設入居の母親および子ども

### ①質問紙調査の実施法

回収用の封筒を同封した調査票一式を入所施設宛に郵送し、施設職員より手渡してもらい、記入後世帯ごとに親子の質問紙を同封してもらい、個別に郵送にて回収した。この回答は無記名とし、回答をもって同意とみなすこととした。

### ②描画の実施法

樹木画については、アンケート調査の際、描画実施のためのガイドを同封し、母親に子どもに対して「木を描く」という課題を行ってもらうように依頼した。

## 3. 調査内容

### (1) 公立小学校児童

#### ①フェースシート

子どもの年齢、性別、疾患や障害の有無について、クラス担任に記入してもらった。

#### ②3枚法による樹木画（バウムテスト）

### (2) 母子生活支援施設入居の母親および子ども

#### ①子どもに関する質問紙

1) フェースシート（子どもの年齢、性別、順位、実子かどうか、発育・発達の問題、疾患や障害、通院、子どもの受けている支援）

2) 元夫・パートナーから子どもへの虐待

元夫・パートナーが該当の子どもに対してどのようなことをしたかについて回答を求めた。「1. 子どもに暴力を振るった」「2. 子どもが怪我をするほどの暴力を振るった」「3. 子どもの食事を与えさせなかった」「4. 子どもが傷つくようなことを言った」「5. 子どもの言動を無視した」「6. 子どもに母親を殴らせた」「7. わざと子どもの前で母親に暴力を振るった」「8. 子どもに性的な関わりをせまった」の8項目について、「よくあった」「ときどきあった」「まれにあった」「全くなかった」の4件法で回答してもらった。

3) 元夫・パートナーと同居中の母子関係

元夫・パートナーと同居中に子どもに対してどのような関わりをしたかについて尋ねた。「1. 子どもと一緒に遊んだり、会話を楽しむ」「2. 子どもを殴ったり蹴ったりする」「3. 子どもにとって必要な世話をしない（食事や着替えなど）」「4. 傷つけるような言葉を言う」「5. ほめる」の5項目について、「よくあった」「ときどきあった」「まれにあった」「全くなかった」の4件法で回答してもらった。

4) 現在の母子関係

現在の子どもに対する関わりについて、3)と同じ項目で回答を求めた。

②子どもによる描画…「樹木画」の作成

4. 分析方法

(1) 対象

①公立小学校児童

調査対象児童全員から樹木画を回収し、258名(男児136名、女児122名)の描画を分析対象とした。分析対象についての年齢分布を表1に示した。公立小学校児童の分析対象の描画を以下小学校群とする。

表1 小学校群

性別	学年						
	合計	1	2	3	4	5	6
男	136	23	18	21	22	18	34
女	122	22	21	21	22	16	20
合計	258	45	39	42	44	34	54

②母子生活支援施設入居の母親および子ども

子どもに関する質問紙は、DV世帯1214票のうち390票(32.1%)、非DV世帯1038票のうち275票(26.5%)が回収された。子どもによる描画は、男児230名、女児234名の樹木画が回収された(回収率20.6%)。表2に示すように、描画に協力してくれた児童の年齢分布は1歳から18歳までで、樹木画の枚数は464枚集められた。

本研究では、木の形態をなす5歳以上の男児183名、女児195名の描画を分析の対象とした(以下、施設群とする)。また、小学校群との比較をする際は、各年齢30名以上の描画があり小学校児童と同年齢である7歳~12歳(男児106名、女児113名)を分析対象として用いた。

表2 施設群

性別	合計	年齢																		
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	
DV あり	男	139	1	3	6	18	15	15	14	9	16	9	10	9	5	4	2	3	0	0
	女	138	3	5	7	10	13	7	15	12	14	10	10	8	8	11	4	1	1	0
	合計	277	4	8	13	28	28	22	29	21	30	19	20	17	13	15	6	4	1	0
なし	男	91	2	4	9	4	12	10	11	8	3	4	8	5	2	2	4	1	1	1
	女	96	1	4	6	5	13	7	9	7	7	10	5	6	6	5	2	2	0	2
	合計	187	3	8	15	9	25	17	20	15	10	14	13	11	8	7	6	3	1	3
合計	男	230	3	7	15	22	27	25	25	17	19	13	18	14	7	6	6	4	1	1
	女	234	4	9	13	15	26	14	24	19	21	20	15	14	14	16	6	3	1	2
	合計	464	7	16	28	37	53	39	49	36	40	33	33	28	21	22	12	7	2	3

## (2) 「擬人的な木」の抽出

小学校群の樹木画1～3枚目、施設群の樹木画を対象に、人のように見える描画の抽出を3名により行った。3名の意見が一致したものを「擬人的な木」とし、意見の分かれたものについては他数名（2～3名）の意見を聞き、協議して決定した。

小学校群、施設群それぞれの「擬人的な木」の出現数および出現率を以下の表3、表4に示した。小学校群は3枚法で施行したため、1枚目、2枚目、3枚目それぞれにおいて出現した枚数を集計した。また、表3の出現の項目は、1人の被験者が2枚か3枚重複して描いた場合も1と数え、「擬人的な木」を3枚のうちいずれかまたは重複して描いた人数を示したものである。

小学校群においては、1枚目で14.0%、2枚目で10.9%、3枚目で16.7%の出現率であった。3枚のうちいずれかまたは重複して「擬人的な木」を描いたのは74名（28.7%）であった。

施設群では、質問紙調査において母親が元夫・元パートナーからのDV体験が有ると答えた児童（以下、DV群）では27名（12.0%）、母親がDV体験がないと答えた児童（以下、非DV群）では10名（6.5%）が「擬人的な木」を描き、DV群の方が非DV群よりも「擬人的な木」の出現率が高かった。なお、16～18歳の12名のうち「擬人的な木」を描いたものはいなかった。

小学校群1枚目と施設群を比較すると、男女ともに小学校群の方が施設群よりも「擬人的な木」の出現率が高かった。また、両群ともにおいて女兒の方が男児よりも出現率が高かった。

表3 小学校群における「擬人的な木」の出現数および出現率

性別	学年						
	合計	1	2	3	4	5	6
出現							
男	39 (28.7%)	5 (21.7%)	4 (22.2%)	7 (33.3%)	4 (18.2%)	5 (27.8%)	14 (41.2%)
女	35 (28.7%)	8 (36.4%)	8 (38.1%)	5 (23.8%)	5 (22.7%)	5 (31.3%)	4 (20.0%)
合計	<b>74 (28.7%)</b>	<b>13 (28.9%)</b>	<b>12 (30.8%)</b>	<b>12 (28.6%)</b>	<b>9 (20.5%)</b>	<b>10 (29.4%)</b>	<b>18 (33.3%)</b>
1枚目							
男	17 (12.5%)	4 (17.4%)	2 (11.1%)	4 (19.0%)	2 (9.1%)	1 (5.6%)	4 (11.8%)
女	19 (15.6%)	5 (22.7%)	6 (28.6%)	5 (23.8%)	2 (9.1%)	0 (0.0%)	1 (5.0%)
合計	<b>36 (14.0%)</b>	<b>9 (20.0%)</b>	<b>8 (20.5%)</b>	<b>9 (21.4%)</b>	<b>4 (9.1%)</b>	<b>1 (2.9%)</b>	<b>5 (9.3%)</b>
2枚目							
男	13 (9.6%)	3 (16.7%)	1 (5.6%)	3 (14.3%)	1 (4.5%)	1 (5.6%)	4 (11.8%)
女	15 (12.3%)	4 (19.0%)	4 (19.0%)	2 (9.5%)	3 (13.6%)	1 (6.3%)	1 (5.0%)
合計	<b>28 (10.9%)</b>	<b>7 (17.9%)</b>	<b>5 (12.8%)</b>	<b>5 (11.9%)</b>	<b>4 (9.1%)</b>	<b>2 (5.9%)</b>	<b>5 (9.3%)</b>
3枚目							
男	24 (17.6%)	3 (13.0%)	2 (11.1%)	2 (9.5%)	3 (13.6%)	5 (27.8%)	9 (26.5%)
女	19 (15.6%)	3 (13.6%)	3 (14.3%)	1 (4.8%)	5 (22.7%)	4 (25.0%)	3 (15.0%)
合計	<b>43 (16.7%)</b>	<b>6 (13.3%)</b>	<b>5 (12.8%)</b>	<b>3 (7.1%)</b>	<b>8 (18.2%)</b>	<b>9 (26.5%)</b>	<b>12 (22.2%)</b>



表4 施設群における「擬人的な木」の出現数および出現率

DV	性別	年齢												
		合計	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	
あり	男	12 (10.8%)	2 (13.3%)	0 (0.0%)	2 (14.3%)	0 (0.0%)	1 (6.3%)	0 (0.0%)	3 (30.0%)	2 (22.2%)	1 (20.0%)	1 (25.0%)	0 (0.0%)	
	女	15 (13.2%)	2 (15.4%)	1 (14.3%)	2 (13.3%)	1 (8.3%)	4 (28.6%)	1 (10.0%)	1 (10.0%)	2 (25.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (25.0%)	
	合計	27 (12.0%)	4 (14.3%)	1 (4.5%)	4 (13.8%)	1 (4.8%)	5 (16.7%)	1 (5.3%)	4 (20.0%)	4 (23.5%)	1 (7.7%)	1 (6.7%)	1 (16.7%)	
なし	男	3 (4.2%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	2 (18.2%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (12.5%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	
	女	7 (8.6%)	1 (7.7%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (14.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	2 (40.0%)	1 (16.7%)	1 (16.7%)	1 (20.0%)	0 (0.0%)	
	合計	10 (6.5%)	1 (4.0%)	0 (0.0%)	2 (10.0%)	1 (6.7%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	3 (23.1%)	1 (9.1%)	1 (12.5%)	1 (14.3%)	0 (0.0%)	
合計	男	15 (8.2%)	2 (7.4%)	0 (0.0%)	4 (16.0%)	0 (0.0%)	1 (5.3%)	0 (0.0%)	4 (22.2%)	2 (14.3%)	1 (14.3%)	1 (16.7%)	0 (0.0%)	
	女	22 (11.3%)	3 (11.5%)	1 (7.1%)	2 (8.3%)	2 (10.5%)	4 (19.0%)	1 (5.0%)	3 (20.0%)	3 (21.4%)	1 (7.1%)	1 (6.3%)	1 (16.7%)	
	合計	37 (9.8%)	5 (9.4%)	1 (2.6%)	6 (12.2%)	2 (5.6%)	5 (12.5%)	1 (3.0%)	7 (21.2%)	5 (17.9%)	2 (9.5%)	2 (9.1%)	1 (8.3%)	

### (3) 「擬人的な木」の検討における項目一覧表の作成

抽出された「擬人的な木」について、先行研究における「擬人的な木」の要素を参照し、どのような要素から人のような木に見えるかを分析し、「擬人的な木」の検討における項目一覧表を作成した(表5)。

①顔は、木の一部に顔が描かれたものである。先に述べたように、Koch,K.は顔が樹冠部に描かれたものと枝の先に描かれたものを「人間の様な木」として指摘している。1) 幹、2) 樹冠は、木の形態をなしており、幹または樹冠に顔が描かれているもの、3) 形態は木の形態をなさず、一部に顔が描かれており人のようにみえるものである。なお、Koch,K.が指摘しているような枝の先に顔が描かれているものは対象の描画では存在しなかった。②冠下枝は、藤岡・吉川が指摘している「人型」であり、樹冠の下から左右に出た枝がまるで手のように見えることで擬人的な木にみえるものである。抽出された「擬人的な木」の中で冠下枝が手のようにみえるものを調べ、左右の枝が1本ずつ描かれているものと手のように見えるが複数の枝が描かれているものに分類した。③根は、描かれた根が足のように見えることで、擬人的な木にみえるものである。先に述べたように、Cotte,S.は樹冠が頭で根が足のようにみえる人のような木を指摘している。ここでは、樹冠が頭のように見えるかどうかは基準とせず、根が足のようにみえるものを該当するものとする。④複数の木は、擬人的に見える木が複数描かれているもので、まるで人が会話をしていたり、一緒に立っているといった、人のような相互的な関わりをしているようにみえるものである。⑤全体は、木の形態を成さず、①～③のような部分の要素から人にみえるのではなく、全体として人のような動きがあることで「擬人的な木」にみえるものである。①～⑤の各項目の具体例を図4～11に示した。なお、①～④の項目は相互に排他的なものではなく、一つの描画がいくつかの項目に該当する場合もあるが、⑤に該当する場合は他の①～④の項目は重複しない。また、①顔に該当するものは1) 幹、2) 樹冠、3) 形態のいずれかに該当し、②冠下枝では1) 左右1本、2) 複数のいずれかに該当するものとする。

表5 「擬人的な木」の検討における項目一覧表

項目	内容
①顔	一部に顔が描かれている 幹に顔が描かれている 樹冠に顔が描かれている 顔が描かれ、木の形態をなさないもの
②冠下枝	1) 左右1本 左右に1本ずつ描かれた冠下枝が手のようにみえる 2) 複数 複数描かれた冠下枝が手のようにみえる
③根	根が足のように見える
④複数の木	擬人的にみえる木が複数描かれている
⑤全体	動きがあることで全体として擬人的にみえる

図4 ①顔1) 幹の例



図5 ①顔2) 樹冠の例



図6 ①顔3) 形態の例



図7 ②冠下枝1) 左右1本の例

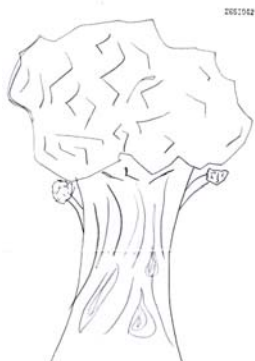


図8 ②冠下枝2) 複数の例



図9 ③根の例

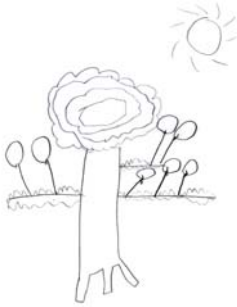
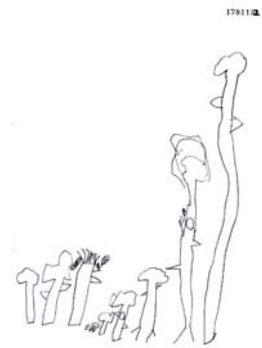


図10 ④複数の例



図11 ⑤全体の例



### Ⅲ. 結果

#### 1. 「擬人的な木」の年齢による出現の変化

図12は、小学校群1枚目と施設群における「擬人的な木」の年齢ごとの出現率を示したものである。小学校群は2月に実施したことから、1年生は7歳、2年生は8歳といった形で換算した。

小学校群においては、男女ともに同様の傾向があり、全体で見ると、1、2年生で比較的出現率が高く、3年生から5年生にかけて減少し、6年生で再び出現するという傾向であった。施設群においては、7歳から9歳までは男女で出現率の変化に違いがあるが、男女ともに10歳で比較的低く、11、12歳で高い出現率を示した。両群を比較すると、男女ともに10歳以下は小学校群の方が施設群より出現率が高いが、11歳以上では施設群の方が小学校群よりも出現率が高くなっている。

表6は、小学校群1枚目における各学年別の出現数および出現率の結果を示したものである。各項目別にみると、①顔、④複数の木は男女ともに、③根は女兒において、2、3年生でのみ出現し他学年での出現はなかった。また、②冠下枝については、1) 左右一本ずつは男女ともに4、5年生で一旦減少し、6年生で再び出現するという傾向が見られた。2) 複数の冠下枝は女兒において、3年生から5年生にかけて減少し、5、6年生での出現はないという年齢による変化の傾向が見られた。年齢による変化の傾向が見られなかったのは、③根と②冠下枝2) 複数の項目でいずれも男児においてであった。

図12 「擬人的な木」の出現率

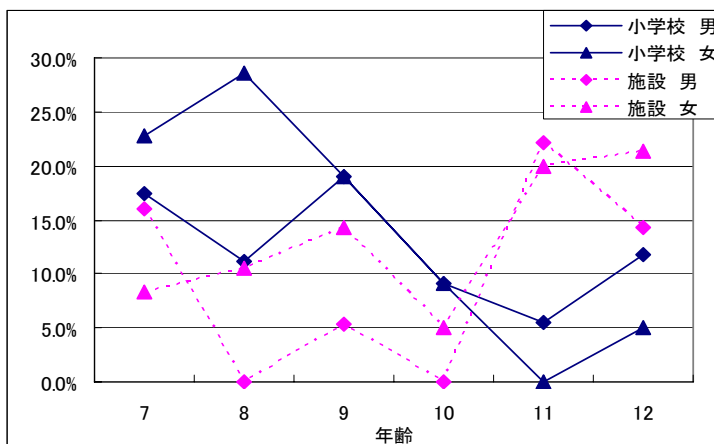


表6 小学校群1枚目における学年ごとの出現数および出現率

学年	「擬人的な木」			①顔									②冠下枝						③根			④複数の木		
	男	女	全体	1) 幹			2) 樹冠			3) 形態			1) 左右1本			2) 複数			男	女	全体	男	女	全体
1	4	5	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	3	5	2	2	4	3	0	3	0	0	0
	(17.4%)	(22.7%)	(20.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(8.7%)	(13.6%)	(11.1%)	(8.7%)	(9.1%)	(8.9%)	(13.0%)	(0.0%)	(6.7%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)
2	2	6	8	1	2	3	0	1	1	0	0	0	2	3	5	0	2	2	1	1	2	1	2	3
	(11.1%)	(28.6%)	(20.5%)	(5.6%)	(9.5%)	(7.7%)	(0.0%)	(4.8%)	(2.6%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(11.1%)	(14.3%)	(12.8%)	(0.0%)	(9.5%)	(5.1%)	(5.6%)	(4.8%)	(5.1%)	(5.6%)	(9.5%)	(7.7%)
3	4	5	9	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	1	3	2	2	4	1	2	3	0	1	1
	(19.0%)	(23.8%)	(21.4%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(4.8%)	(2.4%)	(9.5%)	(4.8%)	(7.1%)	(9.5%)	(9.5%)	(9.5%)	(4.8%)	(9.5%)	(7.1%)	(0.0%)	(4.8%)	(2.4%)
4	2	2	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2	1	3	0	0	0	0	0	0
	(9.1%)	(9.1%)	(9.1%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(4.5%)	(2.3%)	(9.1%)	(4.5%)	(6.8%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)
5	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	0	1	0	0	0
	(5.6%)	(0.0%)	(2.9%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(5.6%)	(0.0%)	(2.9%)	(5.6%)	(0.0%)	(2.9%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)
6	4	1	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	3	2	0	2	1	0	1	0	0	0
	(11.8%)	(5.0%)	(9.3%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(5.9%)	(5.0%)	(5.6%)	(5.9%)	(0.0%)	(3.7%)	(2.9%)	(0.0%)	(1.9%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)
合計	17	19	36	1	2	3	0	1	1	0	1	1	8	9	17	9	7	16	7	3	10	1	3	4
	(12.5%)	(15.6%)	(14.0%)	(0.7%)	(1.6%)	(1.2%)	(0.0%)	(0.8%)	(0.4%)	(0.0%)	(0.8%)	(0.4%)	(5.9%)	(7.4%)	(6.6%)	(6.6%)	(5.7%)	(6.2%)	(5.1%)	(2.5%)	(3.9%)	(0.7%)	(2.5%)	(1.6%)

## 2. 3枚法における「擬人的な木」

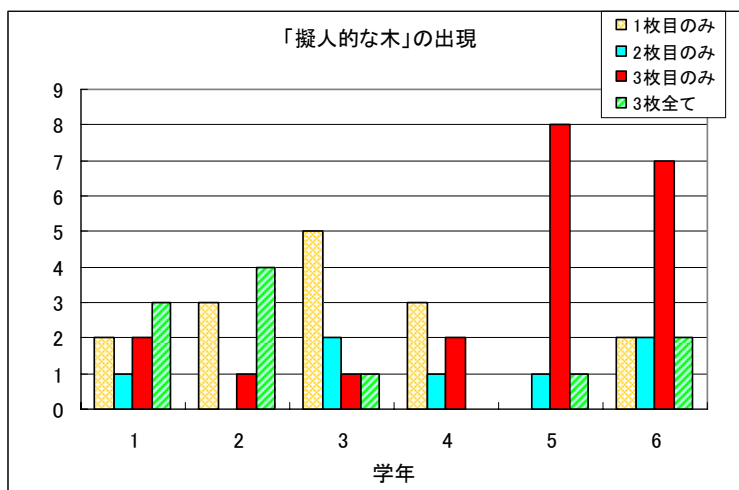
小学校群で「擬人的な木」を描いた児童を対象に、3枚法において「擬人的な木」がどのように出現したかを調べた。表7に示したように、3枚目のみに描いている児童が21名で最も多く、続いて1枚目のみに描いた児童が15名、3枚全てで描いた児童が11名の順で多かった。

図13は、3枚のうち1枚のみ描いた場合の人数および3枚全て描いた人数を各学年別に示したものである。1枚目のみ、2枚目のみで「擬人的な木」が描かれていた場合は、描かれた「擬人的な木」の項目は枝のみや枝+根の組み合わせであり、顔が描かれたものはなかった。一方、3枚目のみで「擬人的な木」が描かれたのは5、6年生に多く、顔が描かれているものが多く出現していた。3枚全てで「擬人的な木」を描いた11名のうち描かれた項目が3枚とも共通していたのは5名で、いずれも1、2年生であった。その他の6名は、1、2枚目が同じ項目で、3枚目に顔のみを描いていた。

表7 3枚法における「擬人的な木」の出現の仕方

人数	3枚のうち1枚出現			3枚のうち2枚出現			3枚全て出現
	1枚目のみ	2枚目のみ	3枚目のみ	1, 2枚目	2, 3枚目	1, 3枚目	
	15	7	21	8	3	3	11

図13 3枚法における「擬人的な木」の出現数



### 3. 施設群における「擬人的な木」の出現

#### (1) 「擬人的な木」の出現とDV・被虐待体験の有無の連関

施設群において、母親のDV被害体験、子どもの父親からの被虐待体験、また、母親からの被虐待体験については元夫または元パートナーと暮らしていたとき（以下、以前と表記）および現在の状況について、母親アンケートの回答をもとに各体験の有無ごとに群分けし、それぞれの群における「擬人的な木」の出現数および出現率を調べた。また、各体験の有無と「擬人的な木」の出現の連関を調べるために $\chi^2$ 検定を行った。2×2のクロス集計表に5以下のセルがある場合は、イエーツの修正を行った。

各被害体験の有無により群分けした各群の人数、各群における「擬人的な木」の出現数と出現率および $\chi^2$ 検定の結果を表8に示した。母親のDV被害体験については、「擬人的な木」の出現との間に連関が見られた ( $\chi^2=2.76, p<.10$ )。父親からの被虐待体験については、子どもへの暴力、母への暴力の目撃と「擬人的な木」の出現の連関は見られなかったが、「子どもの言動を無視」 ( $\chi^2=7.15, p<.01$ )、  
「傷つくようなことを言う」 ( $\chi^2=3.981, p<.05$ ) の心理的虐待にあたる項目と、「食事を与えない」 ( $\chi^2=5.346, p<.05$ )、  
「子どもに性的な関わりをせまった (表8では性的虐待と表記)」 ( $\chi^2=10.846, p<.01$ ) の項目で有意な連関が見られた。一方で、母親からの被虐待体験については、いずれの項目についても「擬人的な木」の出現との連関は見られなかった。

表8 「擬人的な木」の出現とDV・被虐待体験の連関

	施設群 (375)	DV		父親											
				暴力		食事を与えない		傷つくようなことを言う		子どもの言動を無視		子どもの前で母親に暴力		性的虐待	
		有(229)	無(149)	有(178)	無(186)	有(67)	無(298)	有(200)	無(165)	有(200)	無(165)	有(186)	無(175)	有(14)	無(349)
「擬人的な木」出現数	37	27	10	21	16	12	25	26	11	28	9	23	14	5	31
出現率	9.9%	11.8%	6.7%	11.8%	8.6%	17.9%	8.4%	13.0%	6.7%	14.0%	5.5%	12.4%	8.0%	35.7%	8.9%
$\chi^2$ 値		2.767		1.017		5.346		3.981		7.15		1.868		10.846	
有意水準		*				**		**		***				***	

		母親											
		以前			現在								
		暴力		心理的	ネグレクト		暴力	心理的	ネグレクト				
有(167)	無(183)	有(172)	無(180)	有(57)	無(296)	有(174)	無(191)	有(230)	無(135)	有(72)	無(293)		
「擬人的な木」出現数		20	17	21	16	8	29	14	23	23	14	10	27
出現率		12.0%	9.3%	12.2%	8.9%	14.0%	9.8%	8.0%	12.0%	10.0%	10.4%	13.9%	9.2%
$\chi^2$ 値		0.666		1.03		0.914		1.595		0.012		1.386	
有意水準													

\*\*\*p<.01 \*\*p<.05 \*p<.10

(2) 低年齢群, 高年齢群における傾向

5～9歳213名を低年齢群, 11歳～15歳118名を高年齢群として, 上記(1)と同様の統計処理を行った。表9は低年齢群, 表10は高年齢群における各被害体験の有無群別に「擬人的な木」の出現数と出現率,  $\chi^2$ 検定の結果を示している。父親からの被虐待体験について、「傷つくようなことを言う」、「子どもの言動を無視」の項目の少なくともいずれかひとつについて体験が有ると回答した場合に心理的虐待体験(表では心理的と表記)有りとした。また, 母親から被虐待体験については, 母親が以前元夫または元パートナーと暮らしていたときに虐待があったかどうかと「擬人的な木」の出現との連関を調べた。

5～9歳の低年齢群では「擬人的な木」の出現率は8.9%であるのに対し11歳～15歳の高年齢群では14.7%と, 高年齢群の方が低年齢群よりも出現率が高かった。また, 母親のDV被害体験・被虐待体験と「擬人的な木」の出現との連関は, 年齢群によって異なる結果であった。低年齢群では, 父親からの暴力( $\chi^2=4.992, p<.05$ )、食事を与えない( $\chi^2=6.328, p<.05$ )、心理的虐待( $\chi^2=4.681, p<.05$ )、母親からの暴力( $\chi^2=3.862, p<.05$ )の項目で有意な連関が見られた。また, 母親のDV被害体験の有無と「擬人的な木」の出現に連関が見られた( $\chi^2=3.484, p<.10$ )。父親からの暴力および母親からの暴力と「擬人的な木」の出現の有意な連関は, 施設群の全年齢では見られなかったが, 低年齢群においては見られた。一方, 11歳～15歳の高年齢群では, 父親の「食事を与えない」、心理的虐待の項目では, 有群の方が無群よりも「擬人的な木」の出現率が高かったが, いずれの項目においても「擬人的な木」の出現との連関が見られたものはなかった。

表9 低年齢群における「擬人的な木」の出現とDV・被虐待体験の連関

	施設群 5～9歳 (213)	DV		父親			母親(以前)								
				暴力		心理的	暴力		ネグレクト	心理的					
		有(130)	無(87)	有(94)	無(119)	有(35)	無(178)	有(124)	無(89)	有(100)	無(113)	有(33)	無(180)	有(95)	無(118)
「擬人的な木」出現数	19	15	3	13	6	7	12	16	3	13	6	5	14	11	8
出現率	8.9%	11.5%	3.4%	13.8%	5.0%	20.0%	6.7%	12.9%	3.4%	13.0%	5.3%	15.2%	7.8%	11.6%	6.8%
$\chi^2$ 値		3.484		4.992		6.328		4.681		3.862		1.866		1.492	
有意水準		*		**		**		**		**					

\*\*\*p<.01 \*\*p<.05 \*p<.10

表10 高年齢群における「擬人的な木」の出現とDV・被虐待体験の連関

	施設群 11～15歳 (116)	DV		父親						母親(以前)					
				暴力		食事を与えない		心理的		暴力		ネグレクト		心理的	
				有(66)	無(50)	有(24)	無(92)	有(76)	無(40)	有(49)	無(67)	有(19)	無(97)	有(56)	無(60)
「擬人的な木」出現数	17	11	6	8	9	5	12	13	4	7	10	3	14	9	8
出現率	14.7%	15.5%	13.3%	12.1%	18.0%	20.8%	13.0%	17.1%	10.0%	14.3%	14.9%	15.8%	14.4%	16.1%	13.3%
$\chi^2$ 値		0.103		0.786		0.923		0.566		0.009		0.041		0.174	
有意水準															

\*\*\*p<.01 \*\*p<.05 \*p<.10

### (3) 父親による被虐待体験と「擬人的な木」の印象

施設群で出現した「擬人的な木」37枚について、父親からの被虐待体験の種類別に群分けをし、各群の印象を記述した。父親からの被虐待体験について、身体的虐待（「暴力を振るった」）、心理的虐待（「子どもが傷つくようなことを言った」、「子どもの言動を無視した」）のみの場合はそれぞれ身体的虐待群、心理的虐待群とし、身体的虐待と心理的虐待が重複しているものを複合群とした。性的虐待（「子どもに性的な関わりをせまった」）については、他の項目に関わらず性的虐待体験がある場合は性的虐待群とした。また、いずれの虐待体験もない場合は、非虐待群とした。施設群で「擬人的な木」を描いた児童を群分けした結果、複合群15名、心理的虐待群10名、性的虐待群5名、非虐待群6名であった。身体的虐待群は1名であったので、分析の対象としなかった。

筆者があらかじめ群ごとに並べた描画を分析協力者に見せ、施設群の描画であることや群分けの基準は伝えずに、各群の印象を自由に発言してもらった。その際の自由な発言と各群の特徴を示すような描画の例、また、発言をもとにまとめた各群の印象を表11に示した。表11の自由な発言は、発言の出てきた順に記載した。4群のうち印象が強く目にとまった群から順に述べられ、まず複合群、性的虐待群について語られた。次に、心理的虐待群、非虐待群の順で印象が語られた。

表11 父親による虐待の種類別の「擬人的な木」の印象

	複合群(15)	性的虐待群(5)	心理的虐待群(10)	非虐待群(6)
描画例	<ul style="list-style-type: none"> <li>・樹冠が頭、枝が手、根が足で歩いているようにみえる</li> <li>・木の形態を成さず、何人も人が並んで歩いているようにみえる</li> <li>・手(枝)をあげて何かのジェスチャーをしているように見える</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>A: 複数の木を描き、かわいらしい蝶々やサル、鳥、家や滑り台などを描き、紙面を埋めている</li> <li>B: 一本の木を描き、幹に腹巻のように見える模様が描いている</li> <li>C: 3本の同じような大きさ、形態の木を並べて描いている</li> <li>D: 大きなツリーを一本描き、樹冠の中に穏やかな笑顔の顔を描いている</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・樹冠が頭、手のようにみえる冠下枝</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・樹冠が頭、手のようにみえる冠下枝</li> </ul>
自由発言	<ul style="list-style-type: none"> <li>「動きがある」</li> <li>「動きだしそう」</li> <li>「ふにやふにやしている、やわらかい感じ」</li> <li>「不安定感」</li> <li>「幹や枝の描線がまっすぐではない」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「自分を見せない」</li> <li>「隠している感じ」</li> <li>「寂しい人？」</li> <li>「Aは、たくさんいるんなものを書いて、見えない見えないっていう感じ」</li> <li>「Bは、他に注目をひきつけて、本体を見せない感じ」</li> <li>「Cは、自分はどれだ？って感じ。自分を見せない、ごまかしている感じ。」</li> <li>「Dは、見せてるけど、ごまかしている感じ」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「何も感じない」</li> <li>「わからない」</li> <li>「後ろ姿を描いてるみたい」</li> <li>「(複合群に比べ)描線もしっかりしてて、幹も太いが、硬い感じ」</li> <li>「隠してるのとは違う見えなさ」</li> <li>「心を閉ざしちゃってる？」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「一番普通」</li> <li>「描線に気持ち悪さがない」</li> <li>「動きがなく、硬い感じでもない」</li> </ul>
印象の記述	<ul style="list-style-type: none"> <li>・動きがある(動き出しそうな印象)</li> <li>・柔らかく不安定な印象</li> <li>・幹や枝の描線が滑らかな線ではない(左右に揺れている)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・どれが本体かわからない</li> <li>・本体が見えないように、ごまかしている印象</li> <li>・隠しているような印象</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・何も感じさせない硬さがある</li> <li>・幹も太くしっかりしているものが多い</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・描線が滑らか</li> <li>・動きがなく、硬い感じでもない</li> </ul>

#### IV. 考察

##### 1. 樹木画テストの読み方と形態としての「擬人的な木」

###### (1) 「擬人的な木」とは

本研究では、施設群では1枚の木の絵を描かせる通常の樹木画テスト、小学校群ではCastilla,D.の教示に基づき、3枚目に「夢の木」を描かせる3枚法で樹木画テストを実施した。3枚法は「夢の木法」とも呼ばれ、Stora,R.が1960年代に考案した樹木画を4枚連続して描かせる方法を、Castilla,D.が再構成した、教示を変えて樹木画を3枚描かせる方法である。1枚の樹木画と3枚法による樹木画の基本的な解釈方法は同じであるが、3枚法独自の作業仮説として、1枚目の木は被検者の職業的社会的態度、2枚目の木は内的自己像、3枚目の木は主に願望や欲求、欲望を表現しているとされる<sup>6)</sup>。樹木画テストの解釈は、まず細部を分析する前に描画全体の印象を書きとめておくことから始まる。3枚法で実施した場合は、3本の木を比較する。そして、発達の側面、描線、木の形態、用紙上の位置と大きさ、木の各部分と心理学的サインの検討を行う<sup>10)</sup>。

本研究の主題である「擬人的な木」に関するこれまでの記述は、第一に描画発達の経過の中で見られるものであると報告され、第二にそれらの描画発達に関連して以後の年齢で見られた場合は知的障害や未熟さを示唆するものであると指摘されている。そして第三には、Chirol,C.がロールシャッハ・



テストを用いて抽出した、父親のイメージにおそれを抱いているサインであり、これまで指摘されている「擬人的な木」の意味は以上の三点でみることができる。どのような要素をもつ木を「擬人的な木」とするか、またその意味については各研究者によって異なるが、共通している点は、木全体で「人のようにみえる木」に関する記述だということにある。つまり、形態としての「擬人的な木」である。なお、Koch,K.が「人間のような木」として挙げた2枚目の図（図2）は、枝の先に葉や実の代わりに人の顔が描かれたものであり、統合失調症などの精神疾患を示唆するものとして報告されている。このような描画について、Koch,K.は「人間のような木」として記述しているが、木の一部に顔が描かれたものであり木全体として「人のようにみえる木」ではないため、ここでいう形態としての「擬人的な木」には当てはまらない。

## （2）擬人的に見える木の要素について

1) 顔 「擬人的な木」の中で、木の形態をなすもので顔が描かれたものは、幹または樹冠のいずれかに顔が描かれていた。幹に顔を描いた児童は施設群ではいなかったが、小学校群では、樹冠よりも幹に顔を描いた描画の方が多かった。佐々木（2006）によると、幹に描いた顔について、顔の中の目や口をウロのサイン、つまり心的外傷体験の心理学的サインとして解釈できる<sup>26)</sup>。描画を解釈する際は、「擬人的な」形態としての意味とウロのサインのどちらかが優先されるものではなく、同等に解釈の可能性を考慮するのがよいのではないだろうか。

「擬人的な木」のうち、顔が描かれたもので、木の形態をなさないものが多数あった。木の形態をなさず顔が描かれたものは、本研究の対象児童の描画においては、多くは小学校群における夢の木（第3の木）において出現したが、小学校群1枚目では3年生女兒において1枚出現した。Koch,K.が樹冠部に顔が描かれ「人のようにみえる木」として示した図1は、木の形態を成していない。Koch,K.はこのような形態について、知的障害や幼児から低学年において出現すると述べている。また、Castilla,D.によると「木とは思えない形態」は、神経症・精神病、薬物依存を示唆するものであり、また現実との接触の悪さのサインとされる<sup>9)</sup>。本研究においては、1枚目では小学校群3年生女兒の1枚のみであり、Koch,K.の指摘の通り低学年における出現であったが、出現数が少ないことから1枚目で木の形態をなさず顔が描かれた「擬人的な木」が見られた場合は、発達の側面のみでなく「木とは思えない形態」としての意味を考慮する必要があると考えられる。一方、夢の木において「木とは思えない形態」が出現した場合は同様の解釈をそのまますることはできない。夢の木における描画については、後節で考察を加える。

2) 冠下枝 手のように見える冠下枝は藤岡・吉川によって報告されたが、本研究においても「擬人的な木」すなわち、人のようにみえる要素として手のような冠下枝が多く見られた。本研究においては、手のように見える冠下枝が描かれている描画を左右1本ずつ枝が描かれているものと、複数の枝が描かれているものに分類した。また、枝は単線の枝、二本線の枝に関わらず、手のように見える冠下枝はすべて該当するものとした。樹木画テストにおいて枝は、主に対人関係、社会性、被検査者

の可能性や野心、目標が表現されるとされている<sup>9)10)</sup>。手のような冠下枝もさまざまな描かれ方があり、ある年齢以下で見られる場合は発達指標としてみる事ができる項目、それ以後で見られた場合は発達の側面から知的あるいは情緒的な未成熟を示唆するものである項目、また、心理学的サインとして指摘されている項目がある。樹木画を解釈する場合はこれらの枝の指標やサインよりも「擬人的にみえる」形態のサインが優先される。

**3) 根** 「擬人的な木」のうち足のような根が単独で描かれることはなく顔や手のような冠下枝とともに描かれているものであった。樹木画テストにおける根は、安全感、拠り所を求める、あるいは不安定感、現実との接触を反映し、自我の原初性、従属性、本能、衝動、無意識を表現するとされる<sup>10)</sup>。根についても冠下枝と同様、擬人的な形態で描かれている場合は「根」のサインとしてみる前に「擬人的な」形態としての解釈を優先する。

**4) 複数の木** 複数の木の項目は、複数の「擬人的な木」が描かれ、会話をしたりなどまるで人の生活場面を描いたような描画である。木が複数描かれていることから、描いた人の身体イメージの投影という点では異なるが、樹木画の用紙を生活空間として人のような木が描かれているという点で、林(1977)の指摘した「擬人化された木」に近い。林<sup>15)</sup>によると、このような描画は幼児に多いということから、発達の年少児では出現しうるもの、またそれ以後に見られる場合は、知的、情緒的な未成熟を示唆する可能性があるかもしれない。

**5) 全体** 全体の項目は、木の形態を成さず、動きがあることで全体として擬人的にみえるものである。この項目は、先の複数の木と同様、木が人のように動いている、生物学的である点に特徴がある。この項目の出現は、3枚目に描かれた割合が最も大きかったが、中には1枚目に描いた児童もいた。先に述べたように、「木とは思えない形態」は、神経症・精神病、薬物依存を示唆するものであり、また現実との接触の悪さのサインとされる<sup>9)</sup>。「木とは思えない形態」に動きがあり生物のような形態が含まれるのかは明らかではないが、木を描くという課題である樹木画テストにおいて極めて生物学的なものを描くことは、その出現率の低さからも描く人に何らかの問題が示唆される。また、幼児は動物も人間と同じような気持ちや考えを持っていると考える。タカヨワルツによると、幼児が描画の中で動物をコミュニケーションの相手にしたり、動物たちに一般の人間的感情を想像して、絵の中で対話することは一般の描画の中で見られるものであり、その置きかえられた動物は自分であったり、他人であったりする<sup>28)</sup>。このことから、樹木画において生物のようなものが描かれるのは、発達の未熟である可能性も考えられる。樹木画において、生物のようなもの、つまり木以外のものが描かれている場合の解釈として、以上述べたような木を描けないという観点から未熟さとする場合と、木を描けないという観点から検査者に対する反抗、対立の可能性が考えられる。

### (3) 「擬人的な木」の定義

これまでの各研究者による「擬人的な木」で共通している点は、木全体で「人のようにみえる木」であるということである。その上で各部分について研究者により異なる記述がされている。このこと

から、「擬人的な木」といったとき、まずは各要素よりも木全体の形態として「人のように見える」ことを前提とする。例えば、幹から左右に伸びる冠下枝が描かれている描画は多くあったが、枝が短く手のように見えなかったり、幹に対して垂直についている場合などは手のようには見えなかった。そのような描画は、全体の印象を大事にし、木全体として「人のように見えるかどうか」を判断の基準とする。その上で、「擬人的な木」の検討における項目一覧表（表5）の各項目のいずれかには該当するものを、形態としての「擬人的な木」と定義する。

## 2. 「擬人的な木」の発達の側面

本研究では、公立小学校児童（以下、小学校群）と母子生活支援施設入居児童（以下、施設群）を対象に樹木画を実施した。施設群の中には、母親が夫やパートナーからDV被害を受けたり、児童自身が母親や父親および母親のパートナーから虐待を受けた体験をもつ児童が多数含まれており、それらの被害体験の心理的影響を多く受けていることが推定される。また、小学校群では3枚法により樹木画を実施した。3枚法による描画では2枚目、3枚目においてそれぞれの解釈仮説をもつ。以上のことから、「擬人的な木」の発達の側面について、公立小学校児童の1枚目の描画を主な対象として考察する。

### （1）小学校群（1枚目）

小学校群において、人のように見える「擬人的な木」の出現は年齢による一定の発達の変化を示した。男児と女児で若干の違いはあったものの、1年生～3年生までは20%前後の出現率で出現し、4年生で9.1%、5年生で2.9%と減少し、6年生では9.3%に増加した。また、1～3年生では男児よりも女児の方が出現率が高かったが、5、6年生では女児よりも男児の方が高い出現率を示した。1年生～3年生で高い出現率であったのは、Cotte,S.や藤岡・吉川の報告と同様の結果であり、「擬人的な木」が発達の経過の中で出現するものと言える。3年生から5年生にかけて出現率が減少し、6年生で再び出現率が上がっており、また、5年生、6年生では女児よりも男児の方が出現率が高いことは、思春期に入ることと関連していると考えられる。Freud,S.によれば、思春期においては性衝動の高まりと同時に、エディプス・コンプレックスなど幼児期の葛藤が再現される<sup>31)</sup>。Chirol,C.の指摘の通り、「擬人的な木」が「父親のイメージにおそれを抱いている」サインであるとするならば、5、6年生の男児の出現が多く見られるのは、思春期に入り、父親のイメージに対する恐れが高まってきたことが描画に表現されていると考えられる。しかし、小学校群において父親のイメージに関する調査は行っていないため、言明することはできない。

項目別にみた場合、左右1本の冠下枝で先に述べたのと同様の出現率の変化を示した。このことから、左右1本の冠下枝についても、同様の解釈ができるものと考えられる。次に、顔、複数の木については、2、3年生のみでの出現であり発達の低年齢で出現するものといえる。また、小学校高学年以上で見られる場合は、知的、精神的な未熟さを示唆するものといえる。顔が年少児においてのみ出

現し発達指標として見る事ができるという結果は、Koch,K.の報告と一致するものであった。

## (2) 両群の比較および発達の側面の総合的考察

形態としての「擬人的な木」の出現は、7歳から9歳では小学校群の出現率が施設群よりも高かった。7歳から9歳における「擬人的な木」は、Cotte,S.やKoch,K.、一谷らが報告しているように、本研究の結果からも一般的な発達において出現するものと言える。一方で、施設群においては、7歳から9歳の間に小学校群のような高い出現率は示さなかった。被虐待児は虐待の影響により心身の発達が阻害されるという報告は多くなされている。一般群においてある年齢で出現するとされる指標の出現率が施設群において極端に低いことは、施設群の児童の正常な発達が阻害されていることの表れである可能性がある。また、西澤（1994）は、被虐待児は自分を表現することや主張することが、最も危険な行為であることを身をもって体験してきていると述べている<sup>21)</sup>。このことから施設群の児童では自由な表現が妨げられている可能性もある。また、施設群においては、母親が子どもに施行するという実施状況により、母親によって子どもの描画表現の抑制があったことも考えられる。一方、10歳を境に、11歳、12歳では施設群の方が小学校群よりも「擬人的な木」の出現率が高くなっている。小学校群において、男女の出現率の高低も10歳を境に入れ替わり、11歳、12歳では男児の方が女児よりも高い出現率となる。これはすでに述べたように、11歳、12歳は男児が思春期に入る頃であり、思春期におけるエディプス・コンプレックスと関連するものと考えられる。大津<sup>32)</sup>によると、男根期にみられるエディプス・コンプレックスに基づく去勢不安は、男児にとっては非常に強い不安として体験され、両親からの社会的な嫉や罰、威嚇によって助長される。その後一旦抑圧され潜伏期に入るが、性衝動が再び活性化される思春期では、幼児期に未解決であったエディプス葛藤が再び活性化する。また、大村<sup>25)</sup>は、「エディプスコンプレックスは、父親の権威が強いところ、父親が猛威を振るっているところに強く現れてくる特殊な現象だともいわれている」と述べており、施設群においては父親によるDVや子ども虐待といった家庭環境と関連し、思春期においてより複雑で強いエディプス・コンプレックスが現れることが推測できる。また、施設群女児においても、思春期における身体の変化とともに、人間関係の変容や自己の発見や形成の中で、父親に対する葛藤が大きくなることが推測される。以上のことから、思春期に入る年齢において小学校群よりも施設群の方が、Chiril,C.により父親のイメージに対する恐れサインとされる「擬人的な木」の出現率が大きく上がったと考えられる。また、吾妻<sup>30)</sup>は、「エディプス願望が強いほど、父親殺しの願望は父親に投影され、男児にとって父親はいっそう恐いイメージとして映るようになる。こうして去勢不安は、男児にとって非常に強い不安として体験されるようになる。その結果、男児は父親への敵意を抑圧し、エディプス願望を捨てるようになるという。」と記述している。施設群男児において8歳から10歳における「擬人的な木」の出現が他の年齢に比べ極端に少なかったことは、去勢不安により父親への敵意を抑圧する潜伏期と考えることができるかもしれない。

### 3. 母親のDV被害・被虐待体験と「擬人的な木」

#### (1) 心理学的サインの意味

施設群5～15歳においては、母親による被虐待体験との関連はみられず、母親のDV被害、父親による心理的虐待・性的虐待と「擬人的な木」の出現の関連がみられた。なお、父親による心理的虐待、性的虐待との関連はみられたものの、父親による身体的虐待との関連はみられなかった。Gil, E. (1997) は、心理的虐待・性的虐待を受けた子どもに生じやすい心理的問題の一つに、不安や恐怖を挙げているが、身体的虐待を受けた子どもではそのような指摘はされていない<sup>14)</sup>。奥山<sup>23)</sup>も同様の見解を述べている。このことから、「擬人的な木」の出現は不安や恐怖に関連があると考えられ、母親による虐待との関連は見られなかったことから、虐待者である父親への恐怖に関連するものと考えられる。この結果は、Chirrol, Cの指摘を支持するものであり、「擬人的な木」が父親のイメージにおそれを抱いているサインであるとするものの妥当性は高いといえる。また、「擬人的な木」が父親のイメージに対するおそれのサインだとすれば、身体的虐待を受けた児童よりも、心理的虐待・性的虐待を受けた児童の方がより父親のイメージに対するおそれを抱いていると言える。

次に、年齢群別に「擬人的な木」の出現と被害体験との関連を調べた結果、5～9歳の低年齢群では、母親のDV被害、父親による身体的虐待（暴力）・心理的虐待、母親による身体的虐待（暴力）との関連が見られた。一方、11～15歳の高年齢群では、いずれの項目においても関連がみられなかった。この結果から、5～9歳においても、父親のイメージに対するおそれのサインとして「擬人的な木」は出現する。すなわち、小学校低学年において「擬人的な木」が出現した場合、発達の出現と、父親のイメージへのおそれのサインとしての二つの可能性を考慮する必要がある。11～15歳の高年齢群においては、「擬人的な木」の出現と被虐待体験の有無の関連が見られなかったが、施設群における11歳以上で「擬人的な木」の出現率が施設群の低年齢群および小学校群の同年齢群よりも高いことから、被虐待体験とは直接結びつかない形で、父親のイメージが形成されていることが推測される。その一つには、すでに述べたように、思春期におけるエディプス・コンプレックスや思春期において自己の発見や形成に伴って父親との葛藤が大きくなることが考えられる。一方、5～9歳の低年齢群においては、「擬人的な木」の出現が、父親のイメージに対するおそれに加え、父親からの被虐待体験と直接関連していることが示された。このことから、5～9歳の低年齢群において「擬人的な木」が出現した場合、父親による被虐待体験の可能性を示唆する場合があると言える。

#### (2) 被虐待児の「擬人的な木」

表11に示した通り、身体的虐待体験と心理的虐待体験の両方があった複合群では、描線が左右に揺れ、安定しない軟らかく動的な「擬人的な木」、性的虐待群では見せない、ごまかしていると防衛を感じさせる描画、心理的虐待群では「何も感じさせない」硬い印象があり、非虐待群の「擬人的な木」は動的でも硬い印象もなく、描線がなめらかな「擬人的な木」であった。このように、各群別の描画の印象は、それぞれ各種類の虐待が与える心理的な影響に関連すると思われる記述であった。発

達的な経過の中で出てくる「擬人的な木」や未熟さのサインとしてよめる「擬人的な木」と、父親のイメージへの恐れや被虐待体験の可能性を示唆するような「擬人的な木」は描画全体の印象や描線の違いに相違があるかもしれない。しかし、樹木画テストにおいて「擬人的な木」がみられた場合に、描画全体の印象の相違で判断するのは難しい場合も多い。一方で、描線は大きな手がかりになり得る。複合群の描線は他の虐待群の中でも特徴的であったが、他の虐待群の幹における描線を非虐待群と比べてみると、非虐待群のように太さや濃さの変わらない滑らかな描線は少なく、「筆圧の弱い描線」や「繰り返しなぞられた描線」、ぼこぼこして滑らかではない描線が見られた。Fernandez,L.<sup>11)</sup>は、「どんな描線でも薄く弱ければ、脆弱性と壊れやすさを意味する。描線に伸びやかさがなく萎縮していれば、自分の感情をうまくコントロールできない人の苛立ちを表現している」と述べている。Castilla,D.<sup>8)</sup>によると、描線は書く人にとって操作しにくい形で精神及び身体症状を反映するものであり、同様の形態においても描線の違いによって描く人の精神状態は全く別の様相であることが推測される。形態としての「擬人的な木」の意味を検討する際、全体の印象に加え描線が非常に重要な要素であると言える。

#### 4. 3枚法における「擬人的な木」の出現

3枚法における「擬人的な木」の出現をみると、3枚目の夢の木のみで描いた児童が最も多く、3枚目の「擬人的な木」では木とは思えない形態のものも多かった。Castilla,D.<sup>7)</sup>は、「夢の木において、被検者が木とは思えない形態の絵を描いた場合、抽象的や空想を好むと解釈されることもある一方、精神障害のサインの可能性もある。夢の木の解釈では、前に描画した2本の木に見られる要素を考慮しなければならない」と述べている。3枚目のみで「擬人的な木」を描いた児童は5、6年生で顕著に多かった。また、5、6年生が描いた3枚目における「擬人的な木」は顔が描かれたものが多数を占めていた。顔が描かれた「擬人的な木」については、施設群で1枚のみの出現であったため、父親のイメージとの関連を明らかにすることはできなかったが、Koch,K.の報告や本研究の結果からも顔が描かれた「擬人的な木」は年少児で見られるものであり、それ以後に見られた場合は知的、情緒的未熟さのサインとすることができる。馬場は思春期の心理的反応として「両親との幼児的な関係を保ち続けようとする」<sup>2)</sup>と述べ、Koch,K.も「思春期には、その人の中にある“子どもっぽさ”がしばしば成長の過程に抵抗するようである」<sup>18)</sup>と指摘しているように、思春期は親からの自立の中で、依存や甘えとの大きな葛藤が起こる時期といわれている。このことから、5、6年生で、願望や欲求、欲望を表現する夢の木において未熟さのサインである顔が多く描かれたのは、思春期における未熟さや退行への願望が表現されたものだと考えることができる。一方で、幹に顔が描かれている場合は、ウロとしても解釈する必要がある。以上のことから、3枚目の夢の木で、1・2枚目とは異なる形態で顔の描かれた「擬人的な木」が5、6年生で出現することは、思春期における心理的葛藤を表現するものとして解釈できると考えられる。

1枚目のみで「擬人的な木」を描き、2・3枚目では描かなかった児童は15名で、5年生以外の全ての学年において見られた。これは、1枚目にすでに「夢」などの退行の要素が表現され、そのため3枚目の夢の木になったときに、退行の表現をしなくなるものと考えられる。

3枚すべてで「擬人的な木」を描いた児童が11名いたが、そのうち同様の形態（項目）で「擬人的な木」を描いた児童は5名でいずれも小学校1,2年生であった。3枚全てで同じような形態を描くのは、描く人の防衛の強さの表れであるか、“変えられない”知的、情緒的な問題を示唆するものであると言われる<sup>1)</sup>。3枚とも同様の形態による「擬人的な木」を描いたのは1,2年生のみであったことから、知的、情緒的な発達が未熟なため形態を変化させることができなかつたと考えられる。このような出現の仕方が、以後の年齢であった場合は、被検者の防衛の強さを表すものか知的、情緒的な未熟さを示唆するものとみることができる。

## V. 結論

本研究では、樹木画テストにおける「擬人的な木(人のように見える木)」についてその定義を行い、「擬人的な木」の意味について検討した。結論として、以下の3点にまとめた。

### ①「擬人的な木」の定義

「擬人的な木」は、木全体として人のようにみえる形態をもつものとした。また、その要素として、顔が描かれているもの、手のようにみえる冠下枝があるもの、足のような根があるもの、複数の木が人のような動作をしているように見えるもの、木の形態を成さず動きがあることで全体として人のように見えるものの5つがあり、形態としての「擬人的な木」は5つの項目の少なくともいずれかに該当するものと定義した。

### ②父親のイメージにおそれを抱いているサイン

父親による被虐待体験と「擬人的な木」の出現には連関が見られ、「擬人的な木」が父親のイメージに対するおそれのサインであるとする事の妥当性は高いといえた。また、低年齢児においては、「擬人的な木」の出現が父親による被虐待体験の存在を示唆するものである可能性が示された。父親による被虐待体験をもつ児童の描いた「擬人的な木」は、描画全体の印象や不安定な描線に特徴が見られた。

### ③発達の側面

「擬人的な木」は小学校低学年児において見られるものであることが明らかとなり、それ以後の年齢で見られた場合は、知的、情緒的未熟さのサインとして見る事ができる。一方、5,6年生になると「擬人的な木」の出現が再び見られ、これは思春期に入ったことによる父親に対するイメージの変化が関連していると考えられた。また、3枚法における3枚目の夢の木では、顔が描かれた「擬人的な木」が5,6年生で多く見られた。これは、思春期における親への自立と依存の葛藤の中で、

“まだ子どもでいたい”という願望を夢の木に表現したものと考えられた。

## 引用文献

- 1) 阿部恵一郎 2007 日本描画療法学会 ワークショップ
- 2) 馬場謙一 1992 思春期のからだとの出会い こころの科学, 44, pp. 53-57
- 3) Bolander,K. 1977 Assessing Personality Through Tree Drawings. Basic Books. (高橋依子訳 1999 樹木画によるパーソナリティの理解 ナカニシヤ出版 p.170)
- 4) Cotte,S. 1961 Considérations sur le test de l'arbre, Etudes de Neuro psychopathologie in fantile, Marseille, gefasc , pp77-106
- 5) de Castilla,D. 1995 Le test l'arble: Relation humaines et problèms actuels. Masson, Paris. (阿部恵一郎訳 2002 バウムテスト活用マニュアル ―精神症状と問題行動の評価 金剛出版 pp16-20)
- 6) 同書, pp.23-26
- 7) 同書, p.33
- 8) 同書, p.228
- 9) 同書, pp.229-230
- 10) Fernandez,L. 2005 Le test de l'arble Un dessin pour comprendre et interpréter. Collection PsychPocket, Editions in Press. (阿部恵一郎訳 2006 樹木画テストの読み方 ―性格理解と解釈 金剛出版 pp.18-44)
- 11) 同書, p.36
- 12) 同書, p.65
- 13) 藤岡喜愛・吉川公雄 1971 人類学的に見た、バウムによるイメージの表現 季刊人類学 Vol.2 No.3, pp.3-28
- 14) Gil,E. 1991 THE HEALING POWER OF PLAY : Working with Abused Children., Guilford Press, A Division of Guilford Publications. (西澤哲 1997 虐待を受けた子どものプレイセラピー 誠信書房)
- 15) 林勝造 1985 「身体イメージと描画」 バウムテストの基礎的研究, pp69-79 風間書房
- 16) Koch,K. 1952 The Tree test : The tree-drawings test as an aid in psychodiagnosis.2nded., Hanx Huber,Bern u,Stuttgart. (林勝造訳 1970 バウムテスト―樹木画による人格診断法 日本文化科学社 pp4-7)
- 17) 同書, p.17
- 18) 同書, p.108
- 19) Koch,K. 1957 Der Baumtest : Der Baumzeichenversuch als Psycho- diagnostisches Hilfsmittel, 3rd enl.ed. Hank Huber, Bern u.stuttgart.
- 20) 桑原尚佐・前田亨・重本淳一・平谷文子・盛山文雄・加治清・古田島匠・宮原育子・大島元子・盛山和子・小林睦 2003 少年事件における心理アセスメント―「夢の木法」を中心として― 調研紀要, 77, pp.1-31
- 21) 西澤哲 1994 子どもの虐待 誠心書房
- 22) 小川俊樹・田辺肇・伊藤宗親 1997 わが国における臨床心理検査の現状 日本心理臨床学会第16回大会発表論文集, pp.116-117
- 23) 奥山真紀子 1997 被虐待児の治療とケア 臨床精神医学, 26, 19-26
- 24) 奥山真紀子 2006 被害児童への治療・ケアのあり方に関する研究 厚生労働科学研究費補助金(子ども家庭総合研究事業) 総合研究報告書
- 25) 大村政男 1972 男の子にとっての父親・女の子にとっての父親 児童心理,70-75
- 26) 佐々木貴弘 2006 樹木画テスト3枚法におけるウロに関する研究 創価大学大学院修士論文
- 27) Stora,R. et al. 1978 le test de l'arbre, aperçu bibliographique,pp11-43, PUF
- 28) タカヨワルツ 2003 子どもの絵を精神発達 鳥影社 p.66
- 29) 氏原寛他 1992 心理臨床大辞典 培風館 p.105
- 30) 同書, p950
- 31) 同書, p.952
- 32) 同書, p953



## 参考文献

- 會田芳敏・本郷栄子・田中恵美子・末益一雅・小畑喜彰・橋本和明・遠藤雅夫・平澤哲 1990 少年事件におけるバウム・テストの活用について 調研紀要, 57, 38-77
- 荒正人 1972 子どもにとって父親とは何か 精神分析的、言語学的考察 児童心理, 53-56
- 有吉允子 2001 思春期のころころ ～親子の信頼を取り戻すために～ 子どもの虐待とネグレクト, 3(1), 42-45
- Ave-Lallemant, U. 1994 Baum-Test. Ernst Reinhardt Verlag, Munchen. (渡辺直樹・野口克己・坂本堯訳 2002 バウムテスト—自己を語る木：その解釈と診断 川島書店)
- 出石陽子 2001 児童養護施設入所児童の心理的側面に関する研究 —バウムテストとSCTを中心に— 応用社会学研究 東京国際大学大学院社会学研究科, 11号, 62-79
- 一谷彊・林勝造・津田浩一 1966 樹木画テストの研究 —KochのBumtestにおける発達の検討— 京都教育大学紀要, 33, 47-68
- 伊藤隆二・橋口英俊・春日喬編 1994 人間の発達と臨床心理学3 学齢期の臨床心理学 駿河台出版社
- 伊藤隆二・橋口英俊・春日喬編 1994 人間の発達と臨床心理学4 思春期・青年期の臨床心理学 駿河台出版社
- 塙朋子 1999 関係性に応じた情動表出 —児童期における発達の变化— 教育心理学研究, 47, 273-282
- 河合容子 2001 ドメスティック・バイオレンスと子ども 子どもの虐待とネグレクト, 3(1), 138-140
- 家族画研究会編 1990 臨床描画研究V 特集イメージと臨床 金剛出版
- 中農浩子他 2000 被虐待児の描画に表現される心理的特性について —被虐待の内的世界を理解するために— 安田生命社会事業団 研究助成論文集, 36, 48-56
- 西澤哲 1997 虐待の心理的影響と子どもの心理療法 小児の精神と神経37(2), 137-143
- 日本描画テスト・描画療法学会編 2004 臨床描画研究 Vol.19 特集/子どもの臨床現場での描画臨床 —虐待事例を中心に 北大路書房
- 大辻隆夫 2002 投影樹木画法におけるトラウマ指標の統合化とそれを巡る2, 3の問題 児童学研究, 32, 10-15
- 清水将之編 1992 こころの科学44 特別企画思春期 日本評論社
- 田島信元・西野泰広・矢澤圭介編 1985 子どもの発達心理学 福村出版
- 上里一郎監修 2001 心理アセスメントハンドブック第2版 西村書店
- 山内光哉 1987 心理教育のための統計法 第2版 サイエンス社
- Stora, R. 1964 La personnalité à travers le test de l'arbre. Bulletin de psychologie, 17, 1-181.

